

【タイトル】

「西田哲学における不可逆と逆対応

——『無の自覚的限定』から「場所的論理と宗教的世界観」まで——」

喜多 源典（関西大学）

【要旨】

本発表は、西田幾多郎の思索全体を「不可逆」という視座——それは西田哲学研究における伝統的立場、つまり仏教、とりわけ禅の立場に立脚し、処女作である『善の研究』（1911年）の中心概念である「純粹経験」の文脈の中にその後の西田の思索も位置づけて理解しようとする立場とは異なる視座——から捉え直すことを試みるものである。なぜ、「不可逆」という観点から西田哲学を把握しようとするのかというと、本発表では西田の中期における『無の自覚的限定』（1932年）から後期の思索、さらには最晩年の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」（1945年）の「逆対応」概念に至るまでの時期を取り扱うが、その時期に見られる西田の思索には「主客未分」「自他合一」「神人合一」を主とする「純粹経験」の文脈の中には収まり切らない内容が見出せると考えるからである。その内容とは、その時期の西田の思索には「絶対者と人間との関係」に「不可逆」性を有した構造が見られるということである。

「不可逆」とは端的に言えば、絶対者と人間とのあいだには順序を絶対に「逆にすることが出来ない」厳然とした関係構造が存在するということ、換言すれば、絶対者の自己否定が我々人間に「先立って」働いているという「先行性」が存在することを意味する。絶対者と人間における「不可逆」的關係性を強調したのは滝沢克己だが、彼は両者の関係を「不可同・不可分・不可逆」と捉える。つまり、絶対者と人間とは絶対的に断絶しているながら（不可同）、同時に密接につながっている（不可分）のであり、しかも両者は絶対に逆にはできない順序をもって区別される（不可逆）という。滝沢においては絶対者と人間との「不可逆」の關係が最重要視され、そこから不可同・不可分的な關係も規定されて把握される。そして滝沢は西田の思索を十分評価しながらも、西田哲学に対して彼独自の批判を行っている。それは、西田哲学における絶対者と人間との關係には「不可逆」の把握が不徹底で曖昧であるという厳しい批判である。

しかし、筆者は滝沢の西田哲学批判には当たっていない側面も存在すると考えている。本発表では、滝沢のこの西田哲学批判に反論する形で、西田の思索における絶対者と人間との關係に見られる「不可逆」の把握は、中期の『無の自覚的限定』において見出され、後期西田の思索、さらには最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」の「逆対応」概念にまで

一貫して存在していることを明らかにしていきたい。こうした考察を通じて、ややもすれば伝統的立場に固定されがちな西田哲学研究の新しい可能性を拓くものにつながればと筆者は考えている。